

ルカによる福音書 12 章 54 節-13 章 9 節 「霊的な当事者になれ」

1A 主体的な判断 54-59

2A 他人事にははいけない災い 1-5

3A 最後の執り成し 6-9

本文

みなさん、おはようございます。無事に、カルバリーチャペル沖縄での奉仕を終えてきました。旅だった水曜日の晩に、水曜日礼拝で御言葉を取り次がせていただき、それから木曜日から土曜日まで男性の修養会に星野さん、またカルバリー西東京の山東さんと参加しました。私にとって、この時期に沖縄に行ったのは、何か不思議なものを感じました。ちょうど四年前、この時期に沖縄に私は生まれて初めて行ったからです。宣教地から五年半ぶりに日本に移り戻ってきて、日本にあるカルバリーチャペルに挨拶する目的で、沖縄を訪問したのです。妻と共に行きましたが、私たちが泊まらせていただいたのは、今は東松島でご奉仕しているチャックさんと由美さんのお宅でした。カルバリーチャペル・バイブルカレッジ、それからカルバリーチャペル沖縄、そしてカルバリーチャペル那覇に行きました。

そして 10 日に東京に戻ってきました。そうです、東日本大震災が翌日起こったのです。私は、メールで教会のメンバーの安否を確認しました。最後に、午前 2-3 時だったでしょうか、新井晶子さんが徒歩で自宅に戻ってこられたのを確認でき、全員無事でした。そして、その次の日曜日は、明石宅で礼拝を守りました。瀬谷さんが再開した電車で何とかたどり着いたのを覚えています。そして取り次いだ御言葉は、今読んだ、詩篇の交読の箇所からでした。

そして 4 月第二週に、第一回目の被災地救援旅行が始まりました。第一回目は、カルバリーチャペル所沢のトラビス、府中のリッチ、その教会の関係者である広田さん、そして私たち夫婦、それからカルバリー・ホノルルから来たビル・ストンブレイカーも来ました。凸凹道の東北自動車道を走り、仙台に着いたところ、そこは戦場さながらでした。自衛隊や米軍が動いていました。しかし、そこから神の物語が始まりました。東松島の牛網避難所というところの人々と知り合い、その時から少なくとも二十回は行ったであろう旅を始めました。そして今は、

皆さんにも、それぞれに当時の東日本大震災の時に何をしていたかという物語を持っておられると思います。それを主にあって大事に記憶してください。そこに個人々人にとっての人生の分岐点があったでしょうし、日本という国が、敗戦後、大きく変わったと言えるでしょう。主が何かを行なわれたと強く感じる分岐点です。

先ほどの話に戻ります。カルバリーチャペル沖縄で、2011 年 3 月 9 日に、同じように水曜晩の

礼拝で御言葉を取り次ぎました。その時、礼拝前にどなたかが、「震度四の地震が宮城であった」と仰っていたのを思い出します。私は宮城県仙台市出身です。両親や姉のことは思いましたが、いつものことだからと思っていました。気づいていなかったことを後悔しました。幸い、両親も姉も津波から免れました。そして地震が起こってから、連絡をしようにも途絶えました。辛うじて、母親が携帯電話からメールを発信しています。しかし、停電で充電することができませんからどんどん、その文章は短くなっていきました。書く時だけ電源を付けて、それですぐに切っていたからです。そして姉の安否は後で聞きました。彼女が一番、津波の危険のあるところで働いていました。非難したビルの上で、真っ暗になっているところで、一回は津波の海水で閉じ込められて一夜を過ごしたそうです。そして、周りでは助けを叫ぶ声が聞こえていても、もちろん助けることはできないという状態でした。私はひどく後悔しました。

なぜ、震度四の地震があったと聞いた時に、その予兆に気づけなかったのか、ということです。神の与えておられる徴に反応して、次の対策を得ることができたのになぜそれができなかったのだろうかという後悔です。そこから私は教訓を得ました。今、この時代、神は私たちに、霊的にも予兆を与えておられます。それにいち早く気づいて、次に取らなければいけない行動を予測せねばならないのです。その挑戦を受けるためにルカによる福音書 12 章 54 節から 13 章 9 節まで読んでみたいと思います。今日のメッセージを題するなら、「霊的な当事者になれ」ということです。

ルカによる福音書は、他の福音書と比べて、「エルサレムに行く旅」を詳細に描いているのが特徴です。9 章から 19 章までの紙面を費やしています。イエス様が、ガリラヤ地方からエルサレムにまで行く道は、マタイとマルコは短く記していますが、その間にイエス様は数々の教えを行われました。その教えの背後には、「キリストが十字架につけられる」という切迫性に基づくものでした。これから、この重大な出来事が起こる。この重大な出来事があるのだということを肝に銘じて、それでわたしに付いてこなければいけない、というのが、イエス様が基本的に人々に伝えたかったメッセージです。

そこで、その旅には、パリサイ人や律法学者との接触も数多くありましたし、数多くの群衆が付いてきていました。12 章 1 節に、「**そうこうしている間に、おびたしい数の群衆が集まって来て、互いに足を踏み合うほどになった。**」とあります。イエス様に対する人気は、さらに増し加わっていたのです。その現象に、イエス様は喜んでおられませんでした。ご自身にたくさんの人が集まることについて、イエス様は喜んでおられませんでした。むしろ、群衆は事態が十字架という困難な時が来ることを悟っておらず、表面的なところでイエス様に付いていこうとしていたのです。根っこの問題を取り扱わねば、彼らはイエス様に付いていくどころか、むしろご自身に反対して、十字架を付ける側についてしまいます。そしてそれが、事実そうだったのです。

私たちも、この困難な時代の中において、イエス様に付いていっているようで、実は心の中にある問題を処理しないために、イエス様に付いていくどころか、イエス様に反することをいつの間にか

行っていくという危険があります。

福音というのは、私たちの心の中を神が裁くところに基づいています。使徒パウロは、「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。(ローマ 2:16)」と言いました。一方で、律法主義者やパリサイ人は、外側の行いが良ければよいとしました。言い換えると、人の前で正しくなることを求めています。人には良く見えることを求める力が、教会の中にも働くおそれがあります。「私たちキリスト者は、そんなに悪い人間ではない。私たちはあなたがたにとって魅力ある者たちなのだ。」と見せようとする動きが、教会の中に深く、強く働いています。ですから、私たちが福音の中に生きるのか、それともパリサイ派のように人によく思われたいという、人への恐れの中に生きるのか、その二者選択が問われています。

1A 主体的な判断 54-59

12:54 群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が起るのを見るとすぐに、『にわか雨が来るぞ』と言ひ、事実そのとおりになります。12:55 また南風が吹きだすと、『暑い日になるぞ』と言ひ、事実そのとおりになります。12:56 偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。12:57 また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか。

イエス様が言われたこの言葉は、なぜ今の時代の徴を見分けることができないのか？というのは、マタイによる福音書にもあります(16:2-3)。イエスが約束のメシヤであること、旧約聖書の預言者が預言したとおり、イエスが成就しておられること、その徴が数多くあるのに、なおのこと徴を求めてイエスを試す、その頑なさをイエス様は嘆いておられます。

しかし、今ここでイエス様は、「群衆にもこう言われた」と言われています。マタイによる福音書では、パリサイ人へサドカイ人に話しているものでした。しかし、ここでは群衆に話しておられます。つまり、こういうことです。群衆がユダヤ人宗教指導者の言うことを鵜呑みにして、自ら判断していない、ということなのです。57 節に、「なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか。」とイエス様が言われています。自ら進んで、という言葉が大事です。主体的に、主がなされていることが果たして約束のメシヤのなされること、その通りのことであるかを自ら進んで判断することができるのです。ところが、彼らはただ、ユダヤ人指導者の言われるままにしていたという、受動性があるのです。

神の前に立つ時に、人間はおのおのが申し開きしなければいけません。「人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。(黙示 20:13)」こうも書いてあります。「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。(2コリント 5:10)」したがって、自分の人生について自分が責任

を負わなければいけないのです。ところが、「これまで、このように教えられてきたから。」「このように、これまでやってきたから。」「今まで聞いたことがない。」というような理由では、神の前に出ていきません。私たちはますます、聖霊に満たされて、自分自身で判断して見分けて、それで主の御心を知るようにしていけないといけません。それを放棄して、ただ言われるままに生きることをイエス様は咎めておられるのです。

12:58 あなたを告訴する者といっしょに役人の前に行くときは、途中でも、熱心に彼と和解するよう努めなさい。そうでないと、その人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行きます。裁判官は執行人に引き渡し、執行人は牢に投げ込んでしまいます。12:59 あなたに言います。最後のレプタを支払うまでは、そこから決して出られないのです。」

この喩えは、他の福音書では人と和解しなければいけない、赦しが必要であるという文脈の中で出てきます。しかし、ここでイエス様は人との関係でこのことを話しておりません。これは、ご自身と群衆一人一人の関係の中で話しておられます。この喩えでは、イエス様が告訴しておられる方です。そして、裁判官は父なる神です。イエス様は、今、「わたしがこれだけのしるしを行なったのに、あなたがたは漫然と聞いている。ただ、いっしょにいることだけで満足している。しかし、それでは不十分なのだ。わたしはこれからエルサレムに行き、苦しみを受けるのだ。このことを悟らなければ、あなたがたは神の国に入れるどころか、神の国から締め出されてしまう。」と訴えているのです。

ここでイエス様の言葉で大事なものは、「熱心に」という言葉です。主が戻ってこられること、主が裁かれることについて、熱心に(diligently)自問自答しなければいけないということです。しっかりと、主がなされようとしていることを見ているのか？ということです。

2A 他人事にはいけない災い 1-5

このようにイエス様は、彼らに対して警告の言葉を語っておられるのですが、それが一向に通じない群衆がそこにいました。全くその警告を無視するかのように、他の人々がイエス様に話し始めます。

13:1 ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜたというのである。13:2 イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。13:3 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。

これは云わば、政治問題をイエス様に尋ねました。イエス様は、たくさん付いてきている群衆から、このように福音の本質から外れた問題を持ってこられていました。ルカ 12 章 13 節において

は、群衆の一人が、「先生。私と遺産を分けるように私の兄弟に話してください。」と言ってきたことが書かれています。イエス様は、「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者にしたのか。」と言われました。遺産相続について、自分の正しさを主張する中で、実は心の中で一つの問題をなおざりにしていました。それは「貪欲」です。それでイエス様は、倉を作った貪欲な金持ちの譬えを話されました。

ここでも同じです、政治問題、時事問題を持ってきたのですが、イエス様はその質問の背後にある霊的問題を語られたのです。政治ではなく、福音に導こうとされました。ここでピラトは、ローマの総督です。イエス様を十字架につける判決を下す総督です。歴史上の何の出来事を指しているかは定かではないそうです。ピラトがこのようなことをしたであろう、類似の事件は起こっています。カイザリヤが、ユダヤ属州の首都です。そこには、その首都に必要な水を確保するための、導水橋を建てました。その財源を得るために、ピラトがエルサレムの神殿の金庫から取って使ったというのです。それで怒ったユダヤ人が騒動をカイザリヤで起こしました。ピラトは、ローマ兵たちに一般の市民の服装を着せて、紛れ込ませて、そして一気に彼らを殺したと、ヨセフスが言っています。けれども、その血をエルサレムで、ガリラヤから来たユダヤ人たちの捧げるいけにえに混ぜるところまでやったかは、分かっていません。

ここでイエス様は、ユダヤ人のしたことが悪いのだと言われたら、ユダヤ人の人気を失います。ユダヤ人たちはイエスに反対することでしょう。そしてユダヤ人の側につけば、ローマに反逆する首謀者と見られかねません。政治問題というのは、このように私たちにどちらに付くか、という党派心を引き起こします。

そうした争点ではなく、イエス様は根本的な霊的問題を取り上げられました。それは、「他人事のようにして、ガリラヤからのユダヤ人の中で起こった事件を語っているが、あなたがたは悔い改めなければ、同じように滅びるのです。」ということです。先ほどの話の続きです。おのおのが、イエスの証しに回答しなければいけないのです。それをせずに、他人の身に起こっていることを自分のこととして捉えていない、霊的怠慢について咎めておられるのです。

13:4 また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。13:5 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

ガリラヤ人の件は人が引き起こしたのですが、自然災害においても同じことが言えます。そのような不幸なことが起こったら、その人が何か悪いことをしたからだという議論にすぐに発展します。しかし、そうではなく、「あなた自身が悔い改めなければ、同じように滅びるのですよ。」という警告、注意喚起を神はそうした災難を通して教えておられるのです。そして事実、エルサレムにいる者たちは、約四十年後、紀元後 70 年にローマによって殺され、奴隷となっていたのです。

この言葉は、まさに私たちが日々、目にしているいろいろな事件や災害に当てはめることができます。そして、ここで東日本大震災のことを思い出さなければいけません。その時に「なぜ神はこのような悲劇をお許しになられたのか。」という声がたくさん上がりました。そしてある有名な牧師は、「日本人は偶像礼拝を犯しているから、そのような災いに遭ったのだ。」と言いました。その発言に対して、その国の中でもすごい反発と批判が出ましたが、クリスチャンの間でこのような形でまことしやかに語られることを、残念に思います。

いずれにしても、神への非難をする人が多いです。なぜ、そのように神は殺すのか？という非難です。それにはいくつかの返答があります。一つは、「人には死ぬことが定められている」ということです。神によって人は命が与えられ、また神によって人は命が取られます。そして津波でなくとも、どこかの時点である人は若くして死に、ある人は年老いて死にます。その限られた命の中で私たちは生きています。人はどこかの時点で死ぬのです。ですから、津波のことで神を非難するのは、あたかも、いつまでも永遠にこの肉体で生きていくのごとく考えているからです。

二つ目は、「神は泣いておられる。」ということです。主が何か災難が起こることを許される時は、それを喜んで行っていることは一切ありません。イスラエルがエジプトで奴隷であった時に、その苦しみを見て、その叫びを聞かれました。それでモーセを遣わされました。同じように、主は痛みを共有しておられます。そして、その被造物にある痛みは、キリストが人となられて、十字架において全て味わってくださいました。したがって、私たちキリスト者がその被災地に行き、そしてそこに共にいることが、神が津波を許された大きな理由の一つです。そのことによって、被災地の方々がこの苦しみにはキリストが付いておられるということを知ることができます。そして報いは、十字架における罪の赦しと永遠の命なのだということを知ることができます。

そして三つ目は、「生きている者への警告」です。これをイエス様はここで語っておられます。多くの方は、「なぜ二万人以上のことを殺したのか？」と問いますが、「なぜ二万人以外の人々が今、このように生かされているのか？」ということをお問いたださなければならぬのです。各人が、神を認めないで、キリストの福音を拒むのであれば同じように滅びるのであり、こうした出来事を見ているということは、すべてを支配している神を認め、悔い改めることができるようにしているのです。ところが、今の自分の生活が、このような周りの出来事と連結していることを認めようとしません。いつまでも自分自身の生活が良ければよいのだ、という考えの中に留まっています。いろいろな悪い出来事が起こっていく中で、いつまでも他人事のことのように考えているという自己中心性をイエス様は取り扱っておられるのです。

主は、預言者ハガイを通して、「わたしは、すべての国々を揺り動かす。(2:7)」と言われました。主は、今、国々を揺り動かしておられます。

イスラム国の台頭によって、世界が今、どこも安全ではないことを教えました。そして、イスラム

国がキリスト教徒たちを直接、標的にしていることも分かりました。日本人、後藤健二さんがキリストチャンだから殺害されたかどうか分かりませんが、エジプト人のキリストチャン二十一人が殺されたのは、明らかに彼らがキリストチャンだったからです。そして、「キリスト教徒すべてが、世界のどこにいても標的になる。」と脅迫したのです。すなわち、私たちは初代教会と同じように、イエス様が命じられたのと同じように、自分自身がキリストの名のために首が切られるということも、心で覚悟しなければいけないということを、神は教えておられるのです。さらに、神は私たちに模範を残してくださいました。その二十一人は、斬首される直前に、「わが主イエスよ」と叫んで死にました。そして残された遺族は、キリストの名のゆえに殉教したことを喜び、イスラム国の戦闘員たちを愛し、祝福しようとしているのです。これこそ、キリスト教であり、イエス様がこのような時代に私たちが生きていることを教えておられるのです。

3A 最後の執り成し 6-9

13:6 イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。13:7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、なっていたためしがない。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』13:8 番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。13:9 もしそれで来年、実を結べばよし、それでもだめなら、切り倒してください。』」

イエス様は、神の裁きが間近に近づいていることを、この喩えを用いて語られています。ぶどう園にあるいちじくの木は、イスラエルの民を示しています。ところで、ぶどう園に、ぶどうではなくいちじくを育てるのは、よくあります。旧約聖書の中に、イスラエルがぶどうの木であるとか、いちじくの木であるか、喩えられています。そして、良い行いが実を結ぶことです。イスラエルが神に選ばれたのは、良い行いによって神の栄光を表すことです。

三年経っていますが、実を結ばせていないと主人がいます。これはイエス様が、約三年間、すでに宣教活動をされていることを示しているのでしょう。主がバプテスマをヨルダン川で受けられ、それからガリラヤで宣教を始められて三年が経つのに、悔い改め主を信じ、それにとまなう実が結ばれていなければおかしいのです。ところが、実を見ることができません。それで切り倒すと主人はいいます。イエス様は、ぶどうの木とその枝の例えも語られましたが、実を結ばない枝は焼かれます。実を結ぶからこそ枝の役割を果たすのであり、そうでなければ役に立たないのです。この群衆たちが、イエス様を本当に信じた形跡が見当たらないのです。彼らの生活が変化していないのです。だから、近くに物理的にいたとしても失われてしまうのです。

イエス様はご自身を番人に喩えられます。イエス様が父なる神に執り成しをされます。もう一年そのままにしていだけませんか、肥しを入れて実が結ばれるために猶予をくれませんか、とお願いしています。これが、エルサレムに向かうイエス様の心でした。もうすでに遅すぎるのですが、それ

でも引き延ばして、彼らが実を結べるようお願いしています。これが今、私たちが生きている時代なのだということを知る必要があるでしょう。主が戻ってこられるいろいろな徴があります。すでに、主に従う者とそうでない者の選り分けが行われています。主に属する者は聖霊によって清めを体験しますが、属さない者は火で焼かれます。患難によって滅び、また死後に永遠の滅びに遭います。しかし、神は一人でも滅びることを望まず、悔い改めることを望まれています。このイエス様の執り成しにあるように、神は忍耐深い方です。